老

第5巻

駱駝祥子（ロートシャンツ）
満洲旗人物語

竹中 伸 訳

学習研究社

舍

老舎小説全集　5
駱駝祥子・満洲旗人物語

1981年11月1日　初版発行

定価　2400円

訳　　者　竹　中　伸
発 行 人　鈴　木　泰　二
編 集 人　大　山　治　義
印 刷 所　壮光舎印刷株式会社
製 本 所　株式会社国宝社
発 行 所　株式会社　学習研究社
（〒145）東京都大田区上池台4—40—5
振替・東京8—142930番

☆この本の内容・製本などに関するお問い合わせは，下記あてお願いします。
文書は，東京都大田区上池台4丁目40番5号（〒145）
学研お客さま相談センター「老舎小説全集」係
電話は，東京（03）720—1111（大代表）

本書内容の無断複写を禁じます。

© GAKKEN　　Printed in Japan

0397—165　255—1002

目次

駱駝祥子 ―― 3
満洲旗人物語 ―正紅旗下― ―― 287
解説（日下恒夫） ―― 435

装丁　内藤　正人
地図作成　ムネプロ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

駱駝祥子（ロートシャンツ）

竹中　伸訳

一

私がこれから御紹介しようと思うのは、祥子であって、駱駝ではない。なぜならば、〈駱駝〉というのは彼の綽名だからである。

で、私は、まず祥子についてお話をし、そのうえで駱駝と祥子とがどうして結びついたかを申し上げることにしよう。

さて、北京の車夫には、実に種々様々な流派があって、若くて力が強く、脚力の達者なヤツは、素晴らしく立派な俥を借りて来て、一日極めの〈貸切〉を稼ぐ。この種の車夫になると、自分の気の向いたときに出て行き、いやになると、さっさと引き揚げて来る。といった具合で、俥の出し入れは全く自由である。

そして、俥宿から引き出して来た俥は、一定の〈辻〉や、邸宅の門前などに梶棒を下ろして、ジーッと、好い椋鳥のかかるのを待っている。うまくゆくと、一日に三元五元と、ぼろい儲けをすることがあるが、その代りに運の悪い日になると一日じゅうお客がなくて、俥宿に支払う借賃だけただ損をすることになる。が、彼等はそのくらいのことは平気の平左である。

この派の哥兄連の念願は大体二つあり、一つはお抱え車夫になることであり、もう一つは自分で俥を買って、自分の俥——俥宿からの借り物でない——を持つことである。そして、自分の俥を手に入れて、いわゆる自前車夫になることができたら、もうお抱え車夫になろうと、辻俥をひこうと、どちらでもかまわないのだ。どうせ俥は自分のものだから。

次に、この一派に比べると、少し年をとりすぎたヤツ、または体力の関係で余り速く走れないヤツ、あるいは家族持ちなどで、悠々と好い椋鳥のかかるのを待っておれぬ連中になると、大抵八分新の俥をひく。この連中は、人も俥も割合にきちんとしていて、その言い値も相当の〈尊厳〉を保ち、決して無茶な安値ではひかない。

この派の車夫も一日極め、または半日極めの貸切を稼ぎたがる。特に家族持ちの若い車夫などはまだ元気があるので、夏でも冬でも、夜稼ぎをやる。この夜稼ぎは昼間よりも骨が折れるけれど、収入が多い。

四十を過ぎたヤツ、または、二十歳以下の少年車夫になると、前記の二派ほどの地位を得ることはなかなか容易でない。彼等の俥はガタガタの破俥であって、夜稼ぎなどは

もちろんできない。だから、朝はなるべく早くから出て、午後の四時頃までに、俥の損料と、自分の食い扶持とを稼ぎ出すべく懸命の努力をする。

彼等は、俥がボロで、速力はのろいと来ているから、どうしても〈薄利多売〉でゆかねばならない。かの市場や縁日などで、荷物を積んで走る連中は、大抵この一派である。俥賃が安いだけに、なにも速駆けをするには及ばない。

ここで注目すべきは、二十歳以下の少年車夫——中には十一、二歳の子供で俥をひいているのがある——で、二十歳以後になって、立派な新車をひく〈高等車夫〉になれる者は、極めて少ないという事実である。それは少年時代に負傷をしたり、過労のために病気になったりして、満足な発育ができないためだ。彼等はおそらく一生涯俥をひき、しかも一生涯車夫としての成功もできずに終わることになるだろう。

四十を過ぎた連中は、すでに八年、十年と俥をひいているので、自然体をこわし、世の中の落伍者たることに甘んぜざるを得ないことになり、やがては、路傍で野垂死にをするのが彼等に負わされた運命だということを悟るようになる。

彼等の俥をひく姿勢、客と俥賃のかけひきをするときのあの機転、どれが近路で、どう行くと遠廻りになるという北京八百八町の裏表を知りつくしていること……、これらは皆、彼等の過去の光栄ある歴史の賜物であり、そしてまた、後輩に向かって鼻高だかと話す自慢話の材料でもあるのだ。だが、このような光栄は、少しも彼等の前途の暗さを減じることに役立つものではない。彼等自身も、この点を充分知っているので、得意の講釈を一席やった後では、いつも、ひそかに冷汗を拭き、深い嘆息を吐く。

だが、彼等といえども、今一派の最も不幸な四十前後の中年車夫に比べると、まだまだ幸福な方である。

この一派の車夫というのは、かつて自分が俥をひこうなどとは夢にも考えたことがなく、ほとんど、死ぬか生きるかという境目まで行って、やむにやまれず梶棒を握った連中である。馘になった巡査や学校の小使、元も子もなくしてすってんてんになった小商人、失業した職工や店員等、彼等は売れる物は売り尽くし、質に置けるものは質に入れてしまって、いよいよセッパ詰まった揚句、歯を喰いしばり涙を呑んで、この一条の亡者道を走り出したのだ。

これらの人びとは、すでに人生の働き盛りを過ぎ、今はただ、やっとありつき得た窩窩頭（玉蜀黍粉の饅頭。最低級の主食）が変じてできた血の汗を、都大路のアスファルトの上に流すのであ

る。

力なく、経験なく、友もなく、同業の車夫仲間からまで邪魔者扱いにされる。

彼等のひいている俥は、最もひどいボロ俥で、そのゴム輪は一日に何回となくパンクし、そのたびごとに「済みません。」「御免なせえ。」と、客に謝らねばならず、揚句のはては、銅貨三十文を放り出されても文句もいえず、有難く頂戴するということになるのだ。

この外また、環境や知識の相違によって生ずる一種特別な一派がある。それは、主として西苑や海甸方面生れの者で、彼等は自然西山や燕京大学、清華大学などをその縄張りとし、同様に安定門外生れのヤツは清河鎮や北苑を受け持ち、永定門外の者は南苑へ走る、といった具合にみな長距離の営業をやる。この派の連中になると概して短距離のお客は嫌がる。なぜかというと、この〈マラソン〉を一走りやるとちょっと纏まった金になる。で、三分、五分といった小刻みの営業は嫌がるのだ。

だが、この連中といえども、公使館区域にいる車夫の素晴らしい〈マラソン〉振りには到底かなわない。彼等は専ら外国人を乗せて、公使館区域から万寿山、玉泉山、西山などへ遠出をする。

これには非常な体力が必要であるばかりでなく、一般の車夫が決して彼等と競争することのできない今一つの原因がある。毛唐の飯を食うには、やはりそれ相応の特別知識が要るのだ。すなわち、彼等は多少外国語が喋べれることがそれだ。

英国兵や、仏蘭西兵のいう万寿山、雍和宮（有名なラマ寺）、〈八大胡同〉（当時前門外にあった赤線区域）など、彼等は皆心得たものである。彼等はまたそれぞれ一つ二つ独特の外国語を覚えていて、これは門外不出、決して他人には教えない。

彼等の走法はまた一種特別変わっている。そのスピードは速からず遅からず、いつも心持ち頭を下げて決して傍目をふらず、道の左側に沿って黙々と走り、飽くまで唯我独尊、世俗と争わずといったような一種独特の走法である。

彼等は専ら外国人相手の車夫であるので、背番号入りの袖無しなどは着ず、どの車夫も皆一様に長い袖のシャツに、白または黒のズボンを穿き、ズボンの幅は特に広く、その裾は細い腿帯できちっと緊め上げている。足には千枚差しの厚底のついた黒繻子の靴を履き、いかにも颯爽たるいでたちである。

こんないでたちの車夫が現れると、他の車夫どもは、最早これと競争することを諦めて、皆スゴスゴと立ち去って

しまう。あたかも彼等は一種特別の業者ででもあるかの観がある。

以上簡単な分析を試みたわけだが、さて、わが祥子の地位は一体どの部類に属するのだろう？　それはメーターの針が指すように、正確にはいえないかもしれないが、ここに一応の断定は下せると思う。

祥子に〈駱駝〉という綽名が結びつく前までは、確かに割合に自由な車夫だった。すなわち、年が若くて力が強く、自分の俥を持つ自前車夫の部類であった。自分の俥。自分の生活。すべては皆自分の掌中に在る——高等車夫！

だが、これまでになるのは、決して生やさしい努力ではできないのだ。

一年、二年、いや少なくとも三、四年の間——。

汗、汗、汗、幾万滴、幾十万滴の汗を流して、やっと一台の俥を手に入れることができたのである。雨の日も、風の夜も、歯をくいしばって走り、飯を節し、茶を節し、苦心に苦心を重ねて、やっと贏ち得たその俥！　これこそは、彼の一切の克己、忍耐、刻苦、勉励の総決算に対する報酬であって、それはあたかも百戦苦闘を経た武将に対する勲章にも比すべきものなのだ。

彼がまだ他人の貸俥をひいていた頃には、朝早くから夜おそくまで、東から西へ、南から北へと、ほとんど休む暇もなく、独楽のようにクルクルと絶えず走り回っていた。

このような激しい労働を続けていても、彼は決して眼がくらんだり、心が乱れたりするようなことはなく、常に遠い彼方にある一台の俥を心に描き続けていた。そして、彼は信じた。俥こそは自分に自由と独立とを与えてくれる唯一のものであって、それは自分にとっては手であり、足であるのだ。自分の俥がありさえしたら、もう俥宿の親爺から呶鳴られることもなく、他人にペコペコ頭を下げずに済む。自分の力と、自分の俥とがある限り、そこには無限の食べ物があり、決して飢じい目にあうようなことはないのだと。

彼は決して労苦をいとわなかった。また、一般車夫のように無闇に客の同情にうったえて、金をねだるような悪癖もなかった。ただ彼の聡明さと、絶大なる努力とが、ついに彼をしてその念願を成就させたのである。

もしも、彼が今少しよい環境に生まれ、あるいはもっと教育を受けていたならば、彼は決して車夫風情の仲間入りなどするような人物ではなく、おそらく何事をやらしても、キットうまく機会をつかんで、一かどの成功を収め得たに相違ない。だのに、彼は不幸にして俥をひかざるを得

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

なかったのだ。おお！　彼はこの職業に従事してさえも、なおかつその能力と聡明さとを遺憾なく発揮したではないか！　おそらく地獄に落ちてもただの亡者では終わらなかっただろう。

彼は田舎に生まれたが、両親が亡くなると同時に、僅かばかりの田畑も人手に渡して、十八歳のとき北京へ出て来た。彼は田舎育ちの頑丈さと、真面目さとをもって、およそ力仕事という力仕事はほとんど皆やってみた。そして、彼は間もなく俥をひくことは、最もたやすく金の得られる方法であることを知り、それ以来、収入に限りのある苦力仕事から足を洗うことにしたのだった。

俥拉きという商売はなかなか変化と機会に富んでいて面白い。いつ、いかなる場所で、その望む報酬を得ることができるか全く予測できない。とはいえ、このようなチャンスは、必ずしも偶然に来るものではなく、やはり、人も俥も清潔で、いつもハリキッていねばならない。それはあたかも、好い商品を並べねば好いお客が来ないのと同じ道理である。祥子はこのコツを好く知っていた。

で、彼はいろいろと思案した揚句、自分には確かにその資格があるという確信を得た。

彼には力があり、年も若い。ただ、走ることに余り経験がないので、最初から立派な俥をひくことは、さすがに躊躇せざるを得なかった。だが、これは決して克服することのできない困難ではなく、彼にはもともと立派な体があり、人並み勝れた力があるのだから、せいぜい十日か半月ほどの経験を積みさえしたら、そのうちキット走り方のコツもわかって来るに相違ない。その上で立派な新しい俥を借りることにしよう。

果してお抱え車夫になれるかどうかは分からないが、食べ物や、身の廻りを、でき得るだけ節約してゆけば一年、二年、あるいは三、四年の後にはキット自分の俥――しかも最上等の――を手に入れることができるだろう。

彼は自分で自分の若い血のみなぎっている立派な体を眺めながら、

「そうだ！　時間の問題だ。ただ時間の問題なのだ！　俺はキット、キット、この希望を達して見せる。決して夢ではないぞ！　やろう！」

彼は眼を輝かして立ち上がった。

彼は年のわりに背が高く、筋骨隆々と発達して、まだやっと二十歳そこそこなのに、人を圧するほどの立派な体格になり、ちょっと見ると、もう立派な成人である。――その顔を見ると、まだ天真爛漫な子供っぽいところがありあ

りと残ってはいるが——。

彼は〈高等車夫〉を見るたびに、どうしたら彼等と同じような立派な車夫になり、彼等と競争をして負けないようになれるだろうと、そればかりを考え続けた。そして、私かにその鉄桶のような胸を張り、背丈を伸ばし、広い大きな肩をそびやかすなどして、威厳を示そうと工夫するのであった。

いよいよ彼等と競争ができるようになったら、あのゆったりとした幅の広い白ズボンを穿き、ズボンの裾は、しゃれた細い脚絆でギュッと緊め上げて、偉大な脚線美を遺憾なく発揮するようにしよう。そうすれば、キット水際立った立派な〈高等車夫〉になれるに相違ない。——彼はそんなことなどを考えて、独り悦に入っていた。

彼には別にこれというほどの特徴があるわけではなかったが、その元気潑剌たる顔色は、見る人に好感を抱かせた。頭は大して大きい方ではなく、眼はくるりッと円くて、鼻が高く、眉は短くて粗く、頭はいつも綺麗に剃ってピカピカと光らせていた。顎の肉はキリッと緊り、首は途方もなく大きくて、ほとんど頭と同じくらいに見え、顔はいつも紅潮を帯びていたが、特に目立つのは、顴骨と右耳との間にある一塊の大きな傷痕——小さい時に木陰で睡っていて驢馬に嚙られたのだというが——が微かに光って見えることである。

彼は自分の姿や容貌にはほとんど無関心であり、ただ自分の顔も体も非常に頑丈にできていることに人知れず得意を感じるのであった。彼にとっては、顔もまた五体の一つであって、頑丈でさえあればそれで好いのだ。

彼が初めて北京へ出て来た頃には、好く自慢で倒立ちをやったものだが、倒立ちをやりながら、自分はちょうど樹木のように、真ん中に幹があって、上にも下にも枝や根が茂っているようなものだと考えたことがあった。

そういえば、彼はいかにも木に似ている。朴訥で、頑丈で、いつも黙々としてものをいわず、しかも生き生き、潑剌たる有様は、確かに初夏の空に伸び行く若木を想わせるものがあった。

彼には彼としての考えもあり、彼相当の見識も持っていたが、何分生来口が重く、他人としゃべることが億劫で、いつも沈黙を守っていたので、馬鹿なのか、利巧なのか、さっぱり分からなかった。

車夫仲間では、それぞれ自分達の不遇や窮状を愬えることが、常にその話題であって、辻待ちの時、茶館（茶だけを飲ませる一種の社交場）の中、果ては彼等の住む貧乏長屋の庭先などで顔を

合わせるとすぐ身上話が始まる。ある者は話に実が入り過ぎて大きな奇声を出したり、妙な手真似身振りをしながら、大いに悲憤慷慨するといった具合で、この身上話こそは、彼等の唯一の財産ともいうべきものであって、これらの身上話は、流行歌が伝わり拡がって行くように、次から次へと語り伝えられて行くのである。

祥子は田舎者であって、都会の人達のように口上手でなかった。おまけに生来無口ときているから一層始末が悪い。彼は自分のことは自分が知っていればそれでよい。何も一々他人に知って貰う必要はないといった具合で、いつも独りぼっちで黙々と考え込んでいた。そして、彼は一度心の中でこうだと決心したら、ひたむきにその方向に向かってまっしぐらに走り出した。たとえ行き詰まるようなことがあっても、決して失望せず、二日かかろうが、三日かかろうが、それを突破せずにはおかないという性分で、どんな辛いことがあっても歯を喰いしばってじっと我慢して押し通した。

彼は俥をひこうと決心したその日からやり始めた。彼はまず一台の破俥を借りて来て、早速脚を慣らす練習を始めたのだった。

第一日は練習ばかりで、お客はひかなかった。二日目は開業早々結構商売があった。が、そのために、翌日からまる二日間というものは、どっと床に就いたきり起き上がることができなかった。なんと、脚首は瓢箪形に腫れ上がって、足の上げ下ろしさえできない始末であった。

でも、彼はどんなに痛んでもジッと我慢をした。この痛みは、およそ車夫たらんとする者のかならず一度は経験せねばならない過程であって、これを経なければ一人前の車夫になれないということを知っていたからだ。

脚が好くなって彼は存分に走れるようになった。そして、彼は走ることに、非常な痛快さを感じた。意のままに走れるようになったらもう占めたものだ。彼は北京八百八町の町名はかねてから充分心得ていたので、この点は楽だった。多少廻り路をするくらいは、彼にとって何でもないことである。どうせ力は余るほどにある彼のことだ。

俥の拉き方に就いては、彼の今日までやって来た押したり、ひいたり、担ったり、かついだりする土方仕事の経験を応用することによって、容易にそのコツを呑み込むことができ、さほど難しいとも思わなかった。そして、ここにも彼独特の主義——何事にも細心の注意を払うこと、目前の勝利を争わぬこと——があり、この手で行けば大した失策をするようなこともまずあるまい。ただ一つ彼の悩みは

客に向かって俥賃を糶るような場合に、彼は例の無口さが災いして、いつも古参者連にしてやられることが多かった。

彼はこの自分の短所を知っているので、なるべく〈辻待ち〉の仲間には加わらずに、いつも相待ちの俥のいないところを探して、そこにそっと梶棒を下ろして客待ちすることにしていた。このような辺鄙な場所だと、ゆっくり落ち着いて客と俥賃のかけひきができるからだ。

「お乗りなせえ。俥賃は御随意でようがす！」

時にはこんなふうにいって、俥賃を決めないで走り出すこともあった。彼の態度は極めて慇懃であり、その顔には少しも悪気がないので、誰でも安心して彼の俥に乗った。まさかこの愚直そうな大男が人を騙すのではあるまいかなどと疑うものはなく、同じ疑うにしても、この男は最近田舎から出て来たばかりの新米車夫で、まだ路をよく知らないために、俥賃を決めることができないのだろうと思うくらいなもので、

「分かっているのか？」

と詢ねると、ただ「へへへへへ。」と馬鹿のように笑ってみせるばかり、しかもこの愛すべき笑顔を見ると、誰も何ともいえなくなるのだった。

かくて、二、三週間後にはもうすっかり要領を呑み込んでしまって、自由自在に走れるようになった。彼は、自分の走り方や俥をひく姿勢は確かに悪くないという自信を持った。

この〈走り方〉は、車夫としての能力と資格とを示すバロメーターのようなものであって、足を跳ね上げて、団扇でバタバタと地面を煽ぐような格好をして走るヤツは、大概田舎から出て来たばかりの新米車夫である。首をぐっと下げて、摺足をして、走る速度は歩くのと大差ないが、その格好だけはいかにも走っているように見せるのがある。こういう走り方をするヤツは五十の坂を越した老車夫である。

また経験は充分に積んではいるが、力の足りないヤツになると、一種特別の走り方をする。胸を内側に曲げ、腰をグッと落として股をできるだけ高く上げ、常に足より頭の方が先に出ている。こうするといかにも一生懸命に走っているように見えるが、その実一向に速力が出ていない。彼等はこうした技巧を弄することに依って、自己の〈尊厳〉を保とうとするのだ。

祥子はもちろん、これら数種のどの姿勢をも採らなかった。

彼の足は長く、大股でスッ……スッ……と音を立てないで走る。一歩一歩伸縮自在といった格好で、決して梶棒を動揺させないから、乗客の乗り心地を快適ならしめるばかりでなく、一種の安全感を持たせ、止まれといえば、僅かに二、三歩摺足をするだけで、どんなに速く走っていても直ぐに止まることができる。あたかも彼の力は俥の隅々まで行き渡っているかのようである。

背中を心持ちかがめ、両方の手で軽く梶棒を握って、いかにも軽快に、しかも一歩一歩正確に踏みしめて行く。一見それほど速く走ってはいないようだが、ずんずんと先を行く俥を追い越して行き、速いけれども少しも危な気がない。おそらくお抱え俥をひく連中にもこれほど素晴らしい走り方をするものは余り多くはあるまい。

彼はいよいよ新しい俥をひくことにした。

俥を取り換えたその日、彼はこのような立派な新俥――スプリングが軟らかく、金具は全部白銅製で、丈夫な帆布張りの幌と、一対の瓦斯ランプと、ピカピカ光る細首の銅の大喇叭がついている――を手に入れるには百元余りを要し、もし今少しく塗料や金具の質を落としたものだと、百元ぐらいでも買えるということを知った。つまり、何とかして百元をつくりさえすれば、このくらいの俥を買うことができるというわけである。

そうだ！　一日に十分ずつ貯めれば、一千日で百元になる。一千日！　一千日!!　一千日間十分ずつ貯めることだ。何と気の長いことだろう。

だが、彼は決心した。たとえ一千日かかろうが、一万日かかろうが、必ず俥を買うのだ。その第一歩としてはぜひお抱え俥夫にならなければならぬ。しかも、なるべく交際が広くて宴会の多い主人をもつことだ。平均月十回の宴会があるとすれば、そのたびごとに主人役から飯代として頂戴する祝儀が少なくとも二、三元になる。それに月づきの給料を節約すれば、一元や二元は残すことができ、臨時の収入を合わせると三元や五元の貯金はできないこともあるまい。あれやこれやで、一年に五、六十元を貯めることも、まんざら不可能なことではなさそうだ。こうなりゃ念願成就も近きに在りだ！　彼は思うたばかりでも胸がワクワクするほど嬉しくなって来た。

彼は煙草も吸わず、酒も飲まず、賭博にも手を出さないという具合で、何一つ道楽を持たなかった。それに、家庭の累いもない。だから、ただ一生懸命に稼ぎさえすればそれくらいの貯金はきっとできるはずである。

彼は自分で自分に堅く誓いを立てた。今から一年半の間

に祥子は必ず自分の俥を手に入れるのだ。しかもサラの俥だ。断じて古物や改造物などであってはならないと。

彼はついに本当にお抱え車夫になることができた。だが、事はなかなか彼の思うようにはならなかった。もちろん、彼は一生懸命、力のあらん限り働いた。にもかかわらず一年半の歳月は空しく流れて、なお彼の念願成就には程遠いものがあった。

お抱え車夫には確かになることができた。そして真面目に、万事に注意深く働いた。が、兎角ままにならぬが浮世の常で、彼のあらゆる努力にもかかわらず、運悪くも雇主の方でいろいろの故障がおきて来て、二、三か月で暇を出されたり、またある時は、僅かに七、八日で馘になるという始末で、彼はそのたびごとに新しい雇主を探さねばならなかった。

もちろん、その間でも決して遊んでいるわけには行かない。一面辻俥をひきながら、雇主を探すのだからなかなか容易なことではない。こういうときに限ってよく間違いを起こすものである。彼は努めて心を引き締めて、一生懸命汗みどろになって駆け廻り、俥を買う資金を一銭でも余計に貯めるべくどれほど苦心をしたか分からない。

しかし、いかに心を砕いても容易に雇主が見つからないと、さすがに焦り出して来るのをどうすることもできなかった。もしこのような状態がいつまでも続いたら、果していつになったら俥を買うことができるか分からない。自分はどうしてこんなに運が悪いのだろう。結局、一生涯貧乏車夫で終わらなければならないのではあるまいか？……

彼は俥をひきながら、そんなことをいろいろ考えると、心が暗くなって来た。そして、いつしか平素の注意深さを失って、硝子や瀬戸物の破片に触れてゴム輪をパンクさせ、ついにその日の稼業を中止せねばならないことになった。それくらいで済めばまだ好い方で、悪くすると人にぶッつかったり、人混みの中で俥の幌やランプを落として来たりする。お抱え俥をひいているときには、決してこのような失態を演じたことはなかったが、事志と違い、心がいらいらと焦って来ると、往々にしてかような失態をしでかすことがあった。

俥を毀したら、もちろん賠償せねばならない。こうなると、益々気を焦らせ、その結果はどんな大失策をしでかさないとも限らない。

彼はついに自棄を起こして一日中ゴロリと寝て暮らしたこともあった。だが眼を覚まして、夕陽の淡い光が窓に射しているのを見ると、今日の一日を空しく費やしたことの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.